

〈図書紹介〉

彬子女王殿下著

『日本美のこころ』

最後の職人ものがたり』

小林 一彦

三笠宮彬子女王殿下の、新たなご著書が刊行された。『日本美のこころ 最後の職人ものがたり』（小学館、2019年3月）である。雑誌『和楽』に、2014年1・2月号から2018年2・3月号まで連載されたエッセイから抜粋し、加筆・修正されたものをまとめられた一冊。同じく『和楽』の連載をベースにされた先のご著書『日本美のこころ』（小学館、2015年12月）の姉妹編と申し上げてよい。

彬子様、このように女王殿下をお呼びするのは畏れ多いが、研究所にもすっかりとけ込まれ、学

生たちからも「彬子先生」と慕われていらつしやる学内での姿を、ふだんから拝見している一人として、親しみをこめて、小稿ではこのように表記させていただくことをお許しいただきたい。

彬子様には、すでに『赤と青のガウン オックスフォード留学記』（PHP研究所、2015年1月）、『京都 ものがたりの道』（毎日新聞出版、2016年10月）などのご著書がある。

前者は現代の留学記として白眉であり、私も教室で学生たちに強く勧めている一冊。オックスフォードでの学生生活がどのようなものか、後に続くとする研究者の卵たちには格好のバイブルであり、さらに異文化理解のための西欧旅行記としても読みごたえ十分。真摯に取り組まれた最高レベルの学府でのご研究はもとより、日常生活や異国での奮闘努力のご様子なども、飾り気のない文章でありのままに綴られている。広く国民に受け入れられ、版を重ねている名著である。

また後者は毎日新聞に連載されたエッセイをもとにされたもので、碁盤の目といわれる洛中の通りを丹念に取りあげ、四季折々の風物も巧みに織り交ぜながら、京都への深い愛情と日本の伝統文化へのこまやかな慈しみを、流麗な文体で綴られたものである。

このたびのご著書『日本美のこころ 最後の職人ものがたり』は、日本人の暮らし、衣食住にかかわる伝統工芸や伝統産業、あるいは修理復元、さらにそれらを支える道具づくりの匠たちの技と現状、直面する諸課題さらに未来への展望にまで、焦点があてられた御高著。

彬子様は、あたかも京町家の簾をわずかにうごかして吹きこむすずやかな風のごとく、自然に工房の中へ。またたく間に仕事場の空気と同化されて、職人さんの傍らに昔からそこにいらしたように、居場所を見つけられる。けっして手仕事の邪

魔をされず、時には息を止め、やさしいまなざしは職人さんの指先に表情に筋肉の動きに、さらには背後の薬棚のような引き出しにまで、注がれる。耳を澄まし、肌で受け止め、五感を巧みに使い分けながら、流れるようなことば続きと周到に練られた構成で、書斎の読者をそのまま工房へといざなってくださるのだ。その道の達人たちから引き出された、とっておきの話なども絶妙にちりばめ、ものがたりを織り成していかれるのである。

ご本のかたちは正方形で、日本では古来から^{がたん}形本と呼ばれてきた書型。日本の古典籍は、手漉きの和紙一枚の全紙サイズを、分割して料紙をつくる。その料紙のサイズで本の形は自ずと決まり、二等分した紙を二つ折りにした四ツ半本、三等分してから二つ折りにする六ツ半本が多い。『古今和歌集』などの歌書類は縦長の四ツ半本、『源氏物語』などの物語類は六ツ半本と、ほぼ決まっている。

このたびのご本は、書名の「最後の職人ものがたり」にふさわしく、まさに日本の伝統をふまえた、物語のための枳形本。箱を手にとったときに、なんと題名にマッチした素敵なかたちだろうか、とまず書型に目が引きよせられた。

ご本を収める箱の写真も美しい。箱表は「本藍染」の章で、彬子様が、お好きな色と告白されていた「青」。

紺色のような濃い青も、少し緑がかった青磁器のような青も、水色のような薄い青も好きだ。そこでふと気付いたのだ。青色を示す言葉が、日本語にはとても多いということ。そして、私の好きな青色は、どうやら藍あいを使って生まれる色ばかりであることを。

その本藍染めによつて美しく染められた青糸が、濃い青から薄い青まで六束、上（奥）から下（手前）に茄子紺、瑠璃色、群青、縹、浅葱、水色だろうか、グラデーションで大寫しにされている。

る。綱のようにやわらかにねじられた糸の束は光を受けて輝き、いまにもこちらに盛り上がり迫ってくる晴天の青海原のようだ。ピントは手前が鮮明で明るく、奥の濃い色ほど地模様のように深みがある。「箆たんす笥の引き出しの中は青い服ばかり」という彬子様、身にまとわれる衣服の色かと、ふと見れば、箱の右上隅に赤色が映っている。青との取り合わせは、オックスフォードで博士号を授与された者だけが許される、最初のご本のタイトルにもなった、赤と青のガウンを想わせる。

また箱裏の写真は、鶯色の毘沙門亀甲文様を地に草花鳥虫を織り出したように見える「金唐紙」。優美な古典籍の表紙を飾っていた古裂を思わせ、ため息が出るほどである。

ご本の本体は、純白の布地の包み表紙である。
 『Japanese Art : Untold Stories Last Artisans
 Princess Akiko of Mikasa』の銀色の文字が美しい。
 背表紙も同じで、日本語は一切無い。日本の美の

伝統を人知れず、しかし頑固に守る職人さんたちの、これまで語られることのなかった物語を紡ぎ、世界に向かって紹介したいという彬子様のお考えが、強く察せられる。装丁には布目の裂が用いられ、手触りもなめらかでやさしい。

前後の表紙の中央には、日本の伝統の図案である、こぶりの銀色の雪華文様が一つずつあしらわれ、見返しも表紙と同じ白色で、和紙を想わせる見開きに、前後ともに初雪・雪輪・矢雪など銀の雪華文様が五つ、上品に散らされている。言うまでもなく、彬子様のお印は「雪」。

ご本のどこにも語られてはいないのだが、箱や装丁、書型に至るまで、ご本へのこだわり、伝統美への思いが、さりげなくこめられている。洋書の並ぶ英国の照明を控えた薄暗い図書館でも、スノーホワイトの包み表紙の背に光る銀色の英文タイトルと、天銀の小口は、書架に落ち着いたはなやかさですんなりととけ込むことだろう。

外見も中味も、まさに世界に向けられた、日本美のこころを、職人のものがたりを、紹介し発信するご本なのである。

彬子様が訪ね歩かれたのは、全国津々浦々の職人さんたち。取りあげられている手わざは、すべて二十五種。列記すると、以下のようになる。

烏帽子えぼし 杼ひ 蒔絵筆 京瓦 長崎刺繍 京弓
 本藍染 烏梅うばい からむし 琵琶 金具 キリ
 コ 撥鏤はちる 和鏡 丹後和紙 金唐紙きんからかみ 久米島
 紬 御簾みす 加賀水引 漆掻き道具 駿河炭
 熊本城復元事業 金平糖 コロタイプ印刷
 文化財修理

東日本大震災の被災地からは、災害のたびに人びとのよりどころとなった宮城県南三陸町のキリコ。やはり地震にみまわれた熊本からは、精神的な支柱であった熊本城の復旧復元に携わる熊本城総合事務所の丹念な手作業なども、取りあげられ

ている。

青森・宮城・福島・富山・石川・福井・東京・滋賀・京都・奈良・長崎・熊本・沖縄と、北から南から、お忙しいご公務の合間を縫って、また専任教員の責任持ちコマに迫る授業、複数の演習（ゼミ）をご担当になっていらしゃる中で、「日本文化を未来に残していくために、自分は何ができるのだろうか」と思いながら続けてきた職人さんに出会う旅」（はじめに）は、さまざまな困難もありだったにちがいない。

それでも、彬子様は好奇心の瞳を輝かせ、見事な筆づかいで、職人さんたちひとりひとりの仕事を活写されてこられた。伝統を守り伝える大切さを紹介する、使命感に支えられたお仕事には、ただただ敬服を禁じ得ない。

タイトルには、「最後の職人」のフレーズ。「最後の」は一瞬、どきりとするこぼれである。けれども、冒頭の「烏帽子」では、

取材から4年の時を経て、四津谷さんは風のように旅立たれた。四日市さんにすべてをしつかりと伝え、満足そうに笑っておられるお顔が目に見え、伝統が残る瞬間。それはとてもあたたかなひとときである。

と、伝統が高弟へと継承されていることが語られ、わたしたち読者は安らかな心もちになる。この安らかさには、独特の筆致も大いに関係している。

彬子様の文章には、体言止めが多い。『新古今和歌集』に多用されたこの伝統的な技は、小休止によるリズムと余韻、キリッと締まった変化をもたらす働きがあった。「伝統が残る瞬間。」は、漢字の目立つ体言止め。この的確なキャッチに続くのは、すべてがやわらかなひらがなばかりの和文。ほっとされた、彬子様の心もちが、ありのままに、こうした表記の微妙なゆれを介して反映されているのである。無意識になされたこととすれば、生得の随筆家、天賦の才と申し上げずにはいられない。

素人目には、職人の技は、大量生産の機械に取って代わられるのだろうか、と不安になる。機械化の波は、容赦なく押し寄せているご時世。遠くない未来には、機械（人工知能）が、人間の仕事を次々と奪っていくらしい。「最後のサラリーマン物語」も現実味を帯びていくようで、恐ろしい。ところが、『最後の職人ものがたり』には、胸のすくような話が、随所にちりばめられている。人間はまだまだ機械などには負けない、それは機械だから無理なのだ、と自信が取り戻せる。痛快な（ものがたり）である。

手で叩くから強くなると上田さんは言う。「これを機械でやろうとしたから、金唐革紙はあかんくなったんやな」と。いくら機械工学が発達した世の中でも、機械が人間に及ばないことはほかにもたくさんあるのだろう。

彬子様によれば、17世紀にオランダ船が日本にもたらした「金唐革^{きんからかわ}」は、革に模様を浮き上がら

せ、彩色したものらしい。さすがに日本人、これを革ではなく大量に手に入る和紙で作れないかと工夫を重ね、「金唐革紙」が開発された、今回はじめて知った。革ではないから、虫やかびもつきにくいし、継ぎ目も目立たず、何より比較的安価に生産できる。ヨーロッパに逆輸出され、バツキンガム宮殿の壁紙にも使用されたという。

それが、機械で和紙を漉くようになり質が低下し、大正後期から衰退、ついに技術も途絶えてしまい、そのために文化財の修復も不可能になってしまっていた。それを、金唐革紙の研究に取り組み、絵柄を打ち込む「打ち刷毛」だけでも100本以上を試作するなど四苦八苦の連続で、見事によみがえらせたのが、上田さんだという。

彬子様が引用された「これを機械でやろうとしたから、あかんくなった」とは、けだし名人ならではの至言であろう。

人間の仕事が、いつのまにか機械に近づいて、

あなたの代わりはいくらでもいますから、と使い捨てのリストラが続き、自分の仕事に誇りが持たなくなつて、日本の社会は疲弊し衰退の道をたどつてきたのである。人間が機械に追いつかれ取つて代わられるのではなく、人間のほうから一見精度の高い機械になりたがり、近づき過ぎてしまったツケが、可視化されてきただけの問題なのだということを、思い知らされる。

その点でも印象深いのが、「金具」の章。

面白いなと思つたのが、和釘の表面が思つていたよりざらつとしていたこと。そして意外と凹凸があること。機械的に表面が均一にならされた洋釘よりも、不均等な「粗さ」がしっかりと木にかみ、打ち込めば打ち込むほど効いてくる理由になるのだそうだ。いくら機械化が進んだ現代社会でも、機械が人間に及ばないものはたくさんある。

人工知能に仕事を奪われる心配など、どこかへ

飛んでいつてしまった。どうしよう、などと焦ることはない。人間の手作業でしかできないことは、たくさんあるじゃないか、そう思わせてくれる。胸のすく話である。

彬子様の文章は、緻密ですばらしい。新聞連載時の「京都 道ものがたり」でも、如実に感じられたが、書き出しも絶妙である。さきほどの「金唐紙」でも、

ジョサイア・コンドルという人に初めて興味を持ったのは、私が20歳の頃だった。

独立した一文しかない段落で、章段がはじまる。

父宮様の寛仁親王殿下と同じ場所、綱町三井倶楽部で、彬子様が成年皇族のお仲間入りをされた時に、これまでお世話になった方をお招きしての茶会をされたという。その時に、感じられた「作り物ではない『本物』の重厚感」。コンドルとの2度目の出会いは、英国留学中の日本美術蒐集家

の交遊録に、日本に造詣の深かった彼の名を見出した時。そして3度目の邂逅が「金唐紙」であった、というストーリーのものがたりである。

英国で、輸出された日本の金唐革紙に出会い、来日してから設計した建物に、コンドルは金唐革紙を多用したという。三井倶楽部も、コンドルの設計であった。

このほか二つ三つ例を挙げれば、「蒔絵筆」の章の書き出しは、いきなり不可解な、職人村田さんのつぶやきからはじまる。

「鼠が使えなくなつて、猫で代用するというのは皮肉な話なんですけどね。」

鼠の皮を鞣す職人さんがいなくなつてしまったから、鼠の革が手に入らず、鼠の毛の代わりに使われるようになったのが猫の毛という、残念な現状が後半で明かされる謎解きの妙。

「御簾」の章では、

「黒御簾の密偵」と呼んでいる友人がいる。

黒御簾の内側で演奏している囃子方の友人に、観劇に来ていらした彬子様が、いつもたやすく見つけられてしまうという、そんな身近なエピソードから簾を作る職人さんの手わざへとつなげていかれる。「今度歌舞伎を見に行くときは、黒御簾の密偵よりも、まずはその前にある黒御簾に目が行つてしまふに違いない」、首尾が照応する結びで、着地をピタリと決められる。

おそらく彬子様は、結びの文までしっかりと構想を練られた上で、筆を起こされるのではないだろうか。だから、無駄がない。

ありがちなことだが、無駄のない文章は密度の濃さから、往々にして息苦しく感じられるもの。だが、彬子様の書かれる文章には、それがいいのだ。漢字やひらがなの書き分け、さらに配置にまで、気を配っていらつしやるのでは、と思えてくる。文字と文字の間を、風が吹き抜けるような爽やかさ。清々しく心地よい文体である。

「京瓦」の章も、

風火水土。

古代ギリシアの時代から、世界はこの四つの元素から成ると考えられていた。この四元素によって形づくられている日本文化がある。

瓦。

と詩のような書き出しで、起筆される。

彬子様は物事を観察される眼もたいへん鋭くていらっしやる。

最近、新幹線で東へ西へと移動することが多いが、車窓から見える屋根に瓦がほとんど載っていないことに驚かされる。昔は村々にあつたという瓦屋も姿を消し、岡山は橙色、能登は黒色……といった地方ごとに違う瓦の地域色も失われつつあるようだ。

筆者は北陸地方の大学に十年つとめていた。記憶に刻まれた能登の屋根は、たしかに黒かった。

彬子様のご本を拝読した後、岡山の美術館に洛中洛外図の見学に出かけたが、車窓から屋根ばかり見ていた。すると、かなりのお宅で瓦がほんとうに橙色だったのだ。

各章も、再三にわたり触れてきたが、ひとつひとつが実に緻密に構成されている。

「長崎刺繍」の章では、ご研究の対象とされていた円山応挙の話から、書き起こされる。応挙は写生で知られた名人である。「応挙の作品の魅力は、見たものを見たとおりに描くのではなく、見たものをより本物らしく描いたことだと思う」。ご自身のご専門から、「先日、『現代の円山応挙だ』と考える人に出会った」と、読者を長崎刺繍の世界に導いていかれる。達人の文章は、要約が難しい。無駄がないからだ。彬子様の書かれる文章が、まさにこれにあたる。

以下、省略しての摘記引用は、風合いを落とし

てしまっていることをお許しいただきたい。

長崎刺繍は、寛永年間以降、唐船で長崎にやってきた中国人から伝えられたという。「長崎刺繍と日本刺繍の最大の違いはその『立体感』ではないかと思う」と彬子様は印象を語られる。登場する職人は、長崎くんちの傘鉾垂れの「魚尽し」の復元を10年計画で依頼された、もと画家志望の嘉勢さん。当時、江戸時代の絵師の描いた下絵は行方不明、手探りで復元だった。「漁に同行し、釣り上げられた生きた魚を見て、触って、ひたすら写生を続けた」「工房にも水槽を運び込んで魚を泳がせ、水族館にも何度も足を運んで観察し、下絵を仕上げていった」という。

それでも、本当にこれでいいのか悩んでいたという嘉勢さん。制作を開始してから3年後、奇跡的に英国で発見された原南嶺斎の下絵を目にし、自分が間違っていなかったことを実感する。制作した魚たちと南嶺斎の下絵

がびつたりと合ったのである。

この話を聞いてようやくわかった。嘉勢さんの下絵が、海外の美術館調査で何度も目にしてきた円山応挙の下絵にそっくりなのだと。実際に応挙の魚の下絵を見たことはないけれど、線の入れ方や修正の仕方がとてもよく似ている。その後、嘉勢さんが縫い上げた魚たちを目にし、その思いは確信に変わった。「現代の円山応挙だ」と。

広げられた羅紗の上に並べられた魚たちを見て、『生きている』と思った。それも、いけすの中にいる生気のない魚ではない。大海原を悠々と泳ぐ魚たち。その彼らの一瞬の動きをぱっと切り取ったようだ。興奮して、思わず「本当に泳いでいるみたい」と言葉が口をついた。でも嘉勢さんは、「漁師の人にはこんな魚いないって言われるんですよ」とあくまでも謙虚だ。

本当はこんな魚はいないのに、本物に見える。それは魚たちに嘉勢さんが命を吹き込んでいるからである。応挙は見たものをより本物らしく平面に表現できる人。嘉勢さんは見たものをより本物らしく立体に表現できる人だ。応挙は長崎派の絵画に影響を受け、その画風を確立させたといわれている。

そして「300年の時を経て、長崎がつないだ、作品に命を与えられるアーティストの邂逅を目の当たりにした気がした。」と結ばれている。

「ご専門の分野を交えながら、長崎刺繍がいかによばらしい「工芸」か、わかりやすく説いていく。この筆の力こそ、職人の匠の技と申し上げずにはいられない。

「京弓」の章にも、読み手を、あたかも職人さんの工房に、いまその場に居合わせているかと錯覚させるような、臨場感溢れる描写がある。

まず京弓の複雑な構造が丹念に説明される。そ

して「あて木と弦つるをかける板を付け、麻縄を等間隔に巻いていく。まるで測ったかのように同じ幅で巻かれていく麻縄は、自ら弓に吸い寄せられていつているかのように見える。」に続いて、製作の山場へと筆は継がれていく。

ここからが製作のハイライト。「弓打ち」といわれる作業である。縄の交点のところに、110〜120本の竹のくさびを木槌きづちで打ち込み、絶妙な力加減で弓の反りそをつけていく。1本のくさびの方向やかける力の強さで弓の出来がすべて変わってしまう、スピードと瞬時の判断力が勝負の緊張感のある作業。その鬼気迫る様子ききせまは、まさに戦いに挑む武士そのもので、ひとことも声をかけることができなかった。壮絶な戦いを目の前で見たようで、圧倒されてしばし茫然。「……とまあ、こういうもんです」と柴田さんに声をかけられ、ようやく息をつくことができた。

緊張と緩和。名工の一言が、実に効いている。躍動感溢れる描写である。

彬子様は、職人さんを大切にされていらつしやる。全編に、職人さんに対する敬意が満ちみちているのだ。その所作には、徹底して敬語が使われている。「昔^{むかし}氣質^{かたぎ}の職人さんが中におられる予感がしてくる」「待っていて下さったのは」「お父さまのご結婚を機に新築されたのだそうだ」「迎えてくださった」「お会いした瞬間に」「お弟子さんは取られないんですか?」「うれしそうに言って下さった笑顔に」「代々村田^{むらた}九郎^{くろべ}兵衛の名を継ぎ、蒔絵筆を作り続けてこられた御家柄」などなど、この手の敬体表現はいたるところに見出せる。

職人さんの生きたことばも、そのままに収録されている。思いつくままに挙げさせていただく。「もう次の代までは大丈夫ですわ」（烏帽子）、「どこに何が入っているかを覚えるだけで5年以上か

かりますからね」（杼）、「そんなことあらしません。失敗したらまた水混せて粘土にして作り直したらええ話やさかいに」（京瓦）、「相手を威嚇^{いかく}し、怯^{ひる}ませることが目的であって、『殺す』ことが目的ではないからですよ」（京弓）、「一瞬ですから、瞬^{きら}きしたらいけませんよ」（本藍染）、「昔ながらのやり方にはきつと意味があり、伝えられたことはそのまま伝えていくのが自分たちの使命」（烏梅）、「母ちゃんが1日に孕^{おひ}引きできる分だけ。あまりたくさん刈り取ると怒られちゃうから」（からむし）、「ただ型紙に合わせて切るだけなんですけどね」（キリコ）、「本物の線にも迷いがないでしょう。考えながら彫ったらこの線は出せない。天平時代の職人と同じように自分も彫らなければいけないから」（撥鏤）、「同じことを繰り返すルーティンワークが好きだったから続いたのかもしれないね」（和鏡）、「水の力をいただいているんです」（丹後和紙）、「やっぱり使われているとこ

ろを見といてもらわんと」(金唐紙)、「水引も何人かの人の苦勞によつて作られる。自分の苦勞は微々たるもので、すべて世の中の人のおかげで助けられている。神様・仏様・人様のおかげなのです」(加賀水引)「発注側が先生で、作り手は生徒だ／喜んでもらえると、先生から花丸をもらった気分だよ」(漆掻き道具)、「竹に逆らつてはいけない」(御簾)、「子どもを育てるみたいなものですね」(金平糖)。

紙幅の関係で、とても全部は紹介しきれない。文脈の前後を贅沢に引けないことも、惜しまれる。それでも、道をきわめた練達の人びとのことばには、独特の響きと深みがある。

冒頭の「はじめに」で、彬子様はこのように筆を起こされている。

「最後の職人」は、日本中にどれだけいるのだろうか。その人がいなくなれば、絶えてし

まう技術。それは、日本文化を守る最後の砦であるけれど、ともすれば、すんでのところどころにか持ちこたえている擦り切れかけた綱のような存在である。

さらに「私が行きついた答えは、『伝統とは残すものではなく、残るもの』であるような気がしている。」と続けられ、「今日までその技術が残ってきたのには理由がある。そして、その技術が失われるのにもまた理由があるのである。」と明言されていた。真実をついたきびしい言葉に聞こえるが、職人さんたちにはずつとよりそつてこられた彬子様ならではの、ご実感なのだと思ふとめた。

「最後の職人」は、狭い日本にかぎらなかつた。19世紀半ばのフランスで発明され、世界中に広まったコロタイプ印刷。多色刷りの技術を伝えるのは、世界で京都の便利堂だけだという。「世界の最後の職人」といふべきだろうか。

けれども、ご本で語られるのは「最後の職人」

ばかりではない。いったん途絶えた伝統の技法を研究して「金唐紙」の復元をされたり、正倉院の宝物である象牙の〈撥鏤尺〉作りを独学できわめて再現したり、復活や復元をはたした、再興の祖とでもいべき職人さんも少なくない。さらに村全体で外部から研修生を受け入れ育てる織姫制度をあみだし、その織姫卒業生から30名近い人が村内や近隣地域にとどまり、からむしに関わり続けている福島県昭和村の取り組みなど、明るい未来への予兆も紹介されている。

「人間がいくらあがいても抗えないものはある。今できることは、大切な日本文化が『残る』ための未来を、私たちの力で作っていくことではないだろうか」とは、彬子様の貴重なご提言。日本人の誰しものが、重く受けとめなければならぬと思う。

最後に、写真に触れておきたい。24ページに及ぶ、口絵のカラー写真が豪華である。

だが本文中に、ふんだんに挿入されたモノクロ写真も、風合いがあつてすばらしい。薄暗い工房の内部、また道具類。職人さんの指先、横顔、背中。そして手仕事をのぞきこまれたり、道具類や品物を手にされたり、時々の彬子様のお姿も。その一枚一枚が、味わい深い。

ぜひ、日本文化に興味のある読書子はもとより、たくさんの人たちに、手に取って味読、堪能していただきたいご本である。

（小学館 2019年3月 税別4000円）